目次

夕顔をめぐる物語の方法
——情報の伝達者・惟光、そして右近——……鈴木裕子 1

正妻葵上の存在価値
——悔恨と達成、そして紫上との結婚への影響——……熊谷義隆 29

須磨退去の漢詩文引用
——光源氏の朱雀帝思慕からの考察——……岡部明日香 59

光源氏の流離と天神信仰
——「須磨」・「明石」巻における道真伝承をめぐって——……袴田光康 85

光源氏の「罪」を問う
——秘匿の意図—— …… 今井　上　121

二条東院
——越境の邸第としての試論—— …… 秋澤　亙　151

『源氏物語』若菜下巻の女楽と『とはずがたり』
——演奏されなかった「解釈」—— …… 堀　淳一　177

夕霧の子息たち
——姿を消した蔵人少将—— …… 久下裕利　197

あとがき …… 秋澤　亙・袴田光康　231

夕顔をめぐる物語の方法
——情報の伝達者・惟光、そして右近——

鈴木裕子

はじめに

夕顔巻は、光源氏と夕顔の浪漫的な悲恋の物語に焦点が当てられて読まれることが多い。むろんそれはそれでよいと思うのだが、この巻には、これより後に展開する六条わたりの高貴な女性との恋が初めて語られていたり、直前の空蝉巻で物語としての終結を果たしたかのように見えた空蝉との恋が引き続いていて、その決着が語り収められていたりして、単純な短篇の恋物語のようではなく、実際の構造は、もっと複雑だ。

また、この巻には多様な謎[注(1)]が仕組まれている。謎の中には、光源氏自身ですら〈正解〉にたどり着けていないのではないかと思われるものもある。物語世界を越境して、外部の読者も謎解きを迫られている。解けがたい謎の数々に挑戦して、〈正解〉を求めようとする読者の営みが、重層的な物語世界を創りあげ

ていく。それは、物語の方法[注(2)]と考えてもよさそうだ。

夕顔巻の最も大きな謎は、何と言っても、源氏に奉られた、白い扇に書き付けられた和歌をめぐる解釈であろう。これまでにさまざまな角度からの謎解きがなされ、研究史の蓄積[注(3)]があるが、なかなか決定的な解釈が定められるに至らない。さまざまな立場からの読み解きが可能であり、それぞれに説得力がある。どのように合理的に読み解こうとしても、何らかの綻びができてしまうということではないかと思う。本稿では、敢えて、このような和歌の場面の解釈という「大きな謎」には挑戦せず[注(4)]、私自身が以前より不思議に感じていた、いくつかの「小さな謎」に拘ってみたい。それは、大きなパズルを完成させるために必要なピースの一つになるのではないかと思うからである。

その「小さな謎」の一つとは、夕顔をめぐる物語において、あまりにも惟光の活躍が目立っていることである。光源氏の乳母子としての役割の重要性については、既に貴重な先行研究[注(5)]がある。ここで、乳母子としての親密さが大いに発揮されていることには納得がいく。が、それにしても、ほんの端役であるはずの惟光の言動が、なぜこれほどまで生き生きと描かれるのだろうか。端役[注(6)]の言動を言うならば、夕顔の乳母の子である侍女・右近の存在も、看過できない。特に、夕顔死後の右近の多弁さが気にかかる。

ともかく、まずは、惟光の活躍の中から、特に、夕顔を源氏を結びつけるためにどのように役割を果たしたか、そして、そこから何が導き出されるのか、確認していきたい。

一　惟光の働き

白い扇の和歌の贈り主に興味を抱いた光源氏は、惟光に素性を尋ねた。最初、惟光は素っ気なかったが、源氏の指示に応じて調べていくうちに、彼自身が隣人である女たちへの興味を深めていくことになる。

まず、惟光が最初に伝えた、宿守から聴取した情報を第一次として、要点を挙げておく。

○第一次の情報

・夕顔の花が咲く宿は、揚名介の家である。
・揚名介は田舎に行って留守にしている。
・揚名介の妻は、若くて風流好みであり、宮仕人の姉妹がいる。その姉妹が家に出入りしている。

ここで、光源氏は、扇と和歌の贈り手は、その宮仕人であろうと判断した。「したり顔にもの馴れて言へるかな」、「めざましかるべき際にやあらん」（夕顔・一〇四頁[注(7)]）と思い、男たちとの風流なやりとりに馴れている女が、自分を光源氏であろうと目星をつけて、好奇心から謎めいた歌を詠みかけてきたものに違いないという先入観を懐いたのだ。そういうことならば、無下に情けない対応をすれば、光源氏は風流を解さないつまらない男だと噂を流されてしまうかもしれないのである。それ以来、夕顔の宿の前を通り過ぎるたびに、「ただはかなき一節に御心とまりて、いかなる人の住みかならむとは、行き来に御目とまり給ひけり」（夕顔・一〇五頁）と、気に留めるようになっている。けれども、第一次の情報以上に、惟光が源氏の興味をかきたてる情報を提供できなければ、源氏の夕顔の宿の女への関心は、時の経過とともに失われたのではなかろうか。

源氏の興味をかきたてたのは、惟光の垣間見による情報である。惟光は、隣のことをよく知っている者からの聴取事項に加えて、自分自身で見聞したことを源氏に伝えた。これらは、第一次の情報よりも具体